

団体名	こどもフォーラム	活動タイトル	子どもの声を聴く、子どもアドボカシー
<p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p align="center">■ 活動風景</p>
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>子どもも大人と共に社会をつくる市民の一人として尊重され、様々な場における子どもの参加と意見表明権が保障されていること。そして、子どもが一人の人間として尊重される社会であり、子ども自身が国連子どもの権利条約に示される自らの持つ権利を知っていることや、大人も子どもの権利を理解し、保障できる社会であること。子どもの声が必要な大人の声によってかき消されたり、軽視されたりすることはなく、大人は子どもの声に耳を傾け、虐待やいじめ、体罰など子どもの権利侵害を見逃さない社会であり、子どもが安心して自信をもって自分らしく生きることのできる社会であることだと考えています。</p>		<p>子どものいる様々な場所でアドボカシーカフェを開催。子どもの権利を分かりやすく伝えるために子どもの権利条約関西ネットワークが作った「こどものけんり なんでもやねん！スゴロク」を使用。さらに意見表明権であるアドボカシーのことを伝えました。</p>
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>すべてのこどもが、国連子どもの権利条約に規定されるように、障がいや人種、性別、出自等により差別されることなく、こどもの最善の利益の視点で支えられ、安心して、希望をもって育つことのできる平和な社会をつくるのが私たちの願いです。こどもは、保護され守られるだけの存在ではありません。こどもは社会の一員であり、意思決定を共有するパートナーです。こどもたちの声を聴き、今起こる様々な問題をこどもたちとともに考え、解決に取り組む「こども参加・参画」を進めることが平和な社会を創ることに繋がると考えます。その実現のために、こども、おとな、そして相互がゆるやかにつながり、知恵を持ち寄り、学び合い、意見交換しながら、互いにエンパワメントできることを目指しています。</p>		
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●望ましい人的資源：子どもの声を聴く子どもアドボカイトが安定的に派遣されること。そのためには、スーパーバイザー、管理機関としてコーディネーターが必要である。 ●望ましい物的資源：子どもアドボカイトを派遣するだけでなく、子どもたちが安心して相談やおしゃべりに来れる場所があること ●望ましい活動資金：安定的な子どもアドボカイトの派遣をするために、子どもアドボカシーセンターの運営費が必要である。 ●望ましい情報：常に子どもに関する新しい情報を得ることで、子どもが置かれる状況を理解する。子どもに信頼される子どもアドボカイトの把握をしておくこと 		<p>フリースクール「レインボーハート」でのアドボカシーカフェ その他、児童館やファミリーホームでも実施した。</p>
<p align="center">■ 活動報告</p>		<p align="center">■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>2020年度に続き、子どもアドボカイト専門講座として特に声をあげにくい子どもの立場を「不登校」「非行」「性暴力被害」「性的マイノリティ」の4つの視点から学んだ。</p> <p>アドボカシーカフェは様々な子どものいる場所で実施した。商店街で開催する案があったが、下調べする中で実現が難しいことがわかり、商店街に隣接する児童館で開催した。ユースから高校で実施したい希望があった。短い準備期間では実現できなかったが、学校内カフェをやっている他団体と協力して実施する可能性を見出すことができた。</p> <p>ヒアリングは、対象がマイノリティのため協力者を見つけることが難しかったが、ピアアドボカシーを実践しているユースに出会うことができ、ワーキング委員として、またフォーラムのパネラーとして出席してもらい、子どもを取り巻く現状に則した議論をすることができた。</p> <p>子どもアドボカシーフォーラムでは、ハイブリットで開催した。全国から子どもアドボカシーに関心がある実践者などの参加があった。精神疾患を持つ親に育てられた子ども・ユース、性的マイノリティ、ファミリーホーム、障害児4つの実践を基に議論した。フォーマルアドボカシー（教師、児童福祉施設職員、保育士などの重要性を認識することができた。</p>		<p>2022年6月、子どもアドボカイト制度は児童福祉法に社会的養護の子どもたちの意見表明等支援事業として位置付けられた。しかし、意見表明権の保障は社会的養護の子どもだけでなく、すべての子どもに必要なことを、不登校、非行、性的マイノリティのユースのヒアリングを通して改めて認識した。ヒアリングを踏まえ、すべての子どものアドボカシーを実現するにはどうしたらいいかを当事者ユースと一緒にワーキングで議論することができた。全体像を考えるために子どもアドボカシーの第一人者である研究者の堀正嗣さんに加わってもらい、すべての子どものアドボカシーの構造を考え、どのように仕組みを作っていけばよいか議論し、今後日本においては個別アドボカシーの仕組みを作る必要があることを明らかにした。</p> <p>またフォーラムでは、子どもアドボカシーとは何かを学んだ大学生の意識の変化や子どもの声を聴く取り組みを知るとともにワーキングの議論をさらに深めることができた。また、ユースから子どもアドボカシーは何より子どもがアクセスしやすいものでなければならないことが指摘され、広報のやり方をユースワーキングで検討することができ、子どもアドボカシーこそ、子ども・ユースといっしょに進めるものであることを実践で示すことができた。</p>	
<p align="center">■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p align="center">■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ●子どもアドボカイト専門講座では、子どもの声を聴こうとするときに、思いがけない場面で様々なマイノリティの子どもたちに出会うことがあるが、どんな子どもに出会っても、一人一人の子どもを尊重すること、冷静に受け止める力を持つことなど、子どもアドボカイトとして身に付けたい大切なことを学び、ヒアリングに生かすことができた。 ●アドボカシーカフェでは自分の言葉で子どもの権利やアドボカシーについて説明するスキルを身に付けることができた。 ●ワーキングとフォーラムでは、「すべての子どものアドボカシー」の構造を整理し、今後個別アドボカシーの仕組みが必要であることがわかった。また、人権意識が低いこと、子どもおとなも子どもの権利を知らない人が多いことを課題として共通認識し、子どもアドボカシーが社会全体に変化を生み出すきっかけになれること、アドボカシーカフェ等を取り組みを通して、アドボカイトはその役割を担える存在であることを認識することができた。 		<p>子どもは一人の尊厳をもった人間として尊重される存在であるのに、大人はその認識があまりに低い。子どもを自分の所有物のように扱ったり、子どものためによかれと思って大人がやっていることは子どもの権利の実現を阻んでいたり、権利侵害であることも少なからずある。また、子どもが自分の持つ権利を学んだり知らされていないこともある。子どもと大人両方への子どもの権利(人権)の理解が必要であるが、理解しているのはほんの少数である。ただ、もっと子どもの声を聴くことが大切だという認識は少しずつ広がっている。子どもの権利をベースに子どもの声を聴きマイクとなる子どもの意見表明権の具現化と言われる子どもアドボカシーには、インフォーマル（親、親戚、近所の人等）、フォーマル（先生、保育士等子どもに関わる専門職）、ピアアドボカシー（同じ立場）、独立専門アドボカシー（子どもの側に100%立つ独立した専門的立場）があるが、それぞれの立場でみんながアドボカイトとなれば私たちが考える望ましい社会状況に近づけるのではないかと考える。子どもアドボカシーを知ってもらうための多様なアプローチが必要である。</p>	
<p align="center">■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>		<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>子どもアドボカシー＝社会的養護の子どもものというイメージを多様なマイノリティの子どもを含めすべての子どものアドボカシーにしていくための新たな視点と必要な仕組みを見出すこと</p> <p align="center">を達成しました。</p>
<p align="center">■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>		<p>各分野の当事者経験者が講師として登壇することにより、講師自身に子どもアドボカシーとはどのようなことが理解と認識をもってもらえたこと。ヒアリングに協力してくれた当事者ユースが自分たちの活動がまさに子どもアドボカシーであることに気付いたこと。すべての人がアドボカイトになることで、子どもの権利とアドボカシーを広げていけることを認識できたこと。</p>	